

東洋大学学術情報リポジトリ Toyo University Repository for Academic Resources

妖怪現象の場所論的再構成

著者	甲田 烈
雑誌名	井上円了センター年報
号	25
ページ	121-148
発行年	2017-03-21
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00008599/

妖怪現象の場所論的再構成

甲田烈

koda ritsu

1. はじめに——拡張現実、身体そして場所——

妖怪は場所を折り畳んで立ち現れる。

本稿は井上円了（一八五八～一九一九）の妖怪学の構想を継承する企図のもと、妖怪現象の立ち現れの構造を「場所」に焦点化しつつ説明する端緒を開くことを目的にしている。まずは、二つの一見は異なる現代の世相を点描することから始めよう。

その一つは、ゲームである。今年（二〇一六年）の夏、生活圏にある最寄駅の階段で帰宅ラッシュの時間帯に、一人の男性にスマホを持ちながら突進する女子高生の群れと、あわや衝突というところで、舌打ちをしながら身をおかわす初老の男性を見かけた。このようなことは日常でもあろうが、少々この光景を異様に感じたのは、女子高生たちがスマホのゲーム画面に目を奪われており、全く周囲の人の気配に気づいていない風だったからである。二〇一六年七月にスマートフォン向け位置情報ゲーム『ポケモンGO』（ナイアンテック）が公開され、アプリのダウンロード数はわずか三週間で七五〇〇万回を超えた¹⁾。このゲームをめぐる、普段引きこもっているゲーマーたちが外出行動をとることによる健康増進効果や、地域活性化が期待されるというやや過大な論調が出たの

は記憶に新しい。また、深夜にもかかわらずこのゲームに熱中するあまり、入ってはならない敷地に入り、近所の迷惑になるという危惧から、公共施設や宗教施設において、『ポケモンGO』の使用を制限し、ルールを遵守した上でのプレイを推奨する張り紙が各地で貼られ、中には気の利いたものもあったことは、twitterやSNSで拡散されていた。実際、件数は少ないものの、一〇月には運転中のこのゲームへの熱中により死傷者が出る事故が起きている⁽²⁾。

この『ポケモンGO』の話題は、やはりその三年前の夏(二〇一三年)に発売され、新たな妖怪ブームとして一世を風靡した『妖怪ウォッチ』(ニンテンドー)のブームを忘れさせるほどのものである。一九九〇年代に田尻智のゲームフリークによって制作された『ポケモン』(一九九六年)は、属性や生態域によって分類された一五一種類の「ポケットモンスター」(ポケモン)を収集するという目的が設定され、そのアイデアの元は田尻による昆虫採集の体験をデジタル環境に置き換えるというものだった。中沢新一はこの初期のポケモンに「野生の思考」が発露していると指摘している。現実の風景に重ね描かれる携帯ゲーム画面という疑似自然の中に、子どもたちは互いの贈与を介して疑似生命の博物学を実践しているというのだ⁽³⁾。中川大地によれば、『妖怪ウォッチ』の場合、「コミュニケーション過多な社会環境が引き起こす悩みやトラブルを「妖怪のせい」にして外部化し、さらには妖怪レンズで発見して友達にしていこうという儀式によって無害化する」⁽⁴⁾というところに、その特徴の一端があった。ポケモンは二〇一〇年代に『ポケモンGO』へと発展したが、そこでは町や野山で妖怪を探すというコンセプトの中に昆虫採集の要素も組み入れられており、『妖怪ウォッチ』を意識しつつ旧ポケモンを活かす試みが行われている。では、この新しいポケモンと『妖怪ウォッチ』、そして旧ポケモンを分けるものは何であろうか。中川によれば、それは拡張現実(Augmented Reality)＝ARである。この言葉は「ユーザーが現実空間での活動

を行う際、何らかのデジタルデバイスを用いて「アノテーション」と呼ばれる有益な視聴覚情報をその環境知覚に重畳させることで、「素のままの現実」を〈拡張〉しようというタイプの技術の総称」⑤であり、中川がゲーム史の時代区分において依拠する宇野常寛はより端的に「〈ここではない、どこか〉——すなわち外部に越境することなく、〈いま、ここ〉——この現実の生活世界の内部を掘り下げて、そして多重化する方向」⑥と定義している。

ここで注目すべきは、ARが人間の視聴覚情報を環境知覚に重畳することとして特徴づけられていることである。それは漫画・アニメで昭和期に描かれてきたような仮想現実（ここではない、どこか）を志向しない。たとえば美少女アニメなどに描かれる実際の土地は、「聖地巡礼」として賑わい、画面上のポケモンを求めて奔走する人々は、実際にはいないはずのポケモンをその場所で捕獲するのである。もし、仮想現実であれば、どのような異世界であれ、たとえ宇宙の涯であっても、それは想像上の出来事である。しかしARは、目の前の何でもない（かもしれない）風景をポケモンやアニメ・キャラクターのいる（いた）場所へと変えてしまう。

これとよく似た事情は都市伝説に見られると言ったら、意外だろうか。民俗学者の高岡弘幸は「高知市異界マップ」を作成し、前近代の高知では山間部において山姥や天狗、河川部では河童（エンコウ）のほか蛇、蟹、蝦蟇の妖怪が、山と城下（マチ）に挟まれた里では狐狸の化けた話が多いのに対して、マチでは「山姥や河童といった妖怪ではなく、そのほとんどすべてが化け物屋敷を含む幽霊譚として語られていた」と指摘している。さらに高岡は前近代のマチを結節点として東京を中心に全国の津々浦々が「都市化」「消費社会化」した結果、「現在の幽霊は、出没の場所に関して「橋・峠・トンネル系の幽霊」、会社などの近代的な建物に出現する「建物」系の幽霊、そしてカメラやビデオ、パソコンや携帯電話などに出現する「メディア系」の幽霊という三パターンに分類し、とりわけ「メディア系」についてその非・場所性について強調している⑧。さらに、こうした高岡の考察

を踏まえつつネット上の都市伝説を分析した米津は、「杉沢村」や「くねくね」について言及しつつ、これらが「青森」や「秋田」といった場所が明記されている怪異があることから、「非・場所性」のメディア系の怪異の中の「場所」系の怪異というねじれが生まれているとした上で、「都市化による全国の画一的な「非・場所化」が問題になっているのではないか」(9)と述べている。

たしかに、後述する柳田國男(一八七五―一九六二)のように、「妖怪は場所に出るが、幽霊はどこにでも現れる」と単純には言えない。幽霊は死者の霊であるから、その場で恨みや伝えたいことを残して死んでいるのであり、幽霊こそ「場所に出る」とも言えるであろうし、「メディア系」ということであれば、どんな場所にも立ち現れるともいえよう。この都市伝説をめぐる現代の状況が『妖怪ウォッチ』や『ポケモンGO』と言ったゲームの隆盛の背景と酷似しているのは、野外のある特定の場所がメディアを通して「そこにいないはずの何か」に遭遇してしまう非・場所と化していることではないだろうか。それは先に触れた中川の言葉を借りれば「重畳」ということになる。

とはいえ、ここではゲームや都市伝説の個々の内実について考えることを目的にしてはいない。ARの体験と、一見すると矛盾する妖怪・幽霊をめぐる場所性と非場所性の交錯を、どのように考えれば良いのだろうか。本稿の主題はここにある。そして、考察の手がかりを哲学者の上田閑照による「場所」論に求め、円了による「妖怪宅地」の考察と、その後の民俗学的な妖怪の分類案の諸展開を通して再考してみたい。

ここで、さらに本稿の考察の手がかりとなる上田の「場所」論について一言しておこう。人間存在の場所的構造を問う中で上田は「経験の地平構造」について、それを超越論的相関性における世界構成の問題として位置づけ、地平構造の基本的事態として、「露わにする地平とともに永遠に隠されているものがある」(10)ことを指摘する。

すなわち、「地平」にはどこまで行っても「地平の彼方」ということがあり、そのことは「限る」ことが地平の「開く」ことの可能性の制約になっている。このような事態は「人間存在の「於いてある」世界は「有限な開け」としてそれ自身「限らない開けに於いてある」⁽¹¹⁾と表現される。すなわち、地平の此方でこれこれとして経験される諸事象に対して、知られざる地平の彼方が限りない奥行きになってくるのである。このことは先に述べた「場所」をめぐる「重畳」と重なる事態だと言えるだろう。「場所」は多重であり、見えない場所が見える場所に重なってくるのである。

以下では、次のように論を進める。まず次節では、井上の『妖怪学講義』において「場所」がどのように扱われていたかということを経験の地平構造という観点も留意しながら検討し、次に円了以降の民俗学的・文化人類学的妖怪研究において、妖怪の分類において「場所」とともに「身体」が前景化していくことを確認し、そして最後に、この身体性と経験の地平性を内含するものとして「場所」とその重畳性に着目した妖怪現象の構造を提示してみよう。

2. 円了妖怪学における「場所」の構造

井上円了は『妖怪学講義』の「緒論」において妖怪を分類して「物怪はこれを物理的妖怪と称し、心怪はこれを心理的妖怪と称す」⁽¹²⁾とまず二つに大別し、さらには「真性の妖怪」⁽¹³⁾である真怪を加える。この三者の関係は「物心万有は現象なり。現象の本体におけるは、影の形に伴うが如く須臾も相離れず、しかして二者その体一つ」⁽¹⁴⁾というように密接な相関関係にあるが、それだけにとどまらず、こうした分類が動的な構造を持つことはすでに筆者は指摘したことがある⁽¹⁵⁾。円了はさらに「総論」において「妖怪」そのものを「異常・変態にして、

しかもその道理の解すべからず、いわゆる不思議に属するものにして、これを約言すれば不思議と異常を兼ねるもの」¹⁶とまず概括的に定義し、「異常・変態」とは「変化・新奇を義」¹⁷とすると述べている。このような妖怪の総体的な分類と定義において留意しておいてよいことは、円了が「場所」について触れていないことである。円了による分類はまずそれが「物的か」「心的か（あるいは両者がいかに関わるか）、そしてその根源と物心の相関という学問論的・認識論的関心に制約されている。たとえば「第二 理学部門」において山男などに言及しつつ、「深山幽谷の間には、獣類・猿類の平素見なれざるもの多からん。しかるに、人もしかくのごとき異常の物に会するときは、ただちにこれを一種の怪物として世に伝うるより、かくのごとき怪物の談あるに至ることなしというべからず」¹⁸と「深山幽谷」という特定の場所における見聞違いの可能性を示唆し、さらに「第六 宗教部門」では幽霊に遭遇する場合の原因・事情の一つとして「山間、森林のごとき寂寥たる場所」¹⁹という外情（外部環境）が挙げられているが、「場所」に特化した考察ではない。少なくとも明確な諸学の分類に即して分析を進める場合、円了妖怪学において妖怪が「どこ」に立ち現れ、また出会われているかということとは、副次的な関心ではないのである。

こうした観点から、むしろ興味深いのは、『妖怪学講義』の「第八 雑部門」である。なぜ「雑」であるかといえば、「この部門に属する妖怪は、その現象すこぶる錯雑」²⁰だからであり、冒頭にはまず「第一 総論」の段階では「今回の講義にはこれを略す」²¹とされていた「人為的妖怪」について虚構・政略・利欲・好奇・遊戲・仇怨・技術（人のできないことをすること）・癡狂（精神病に起因するもの）の八種に分類して詳細に記述することを試みている²²。円了によれば「以上に列挙せし種々の人為的妖怪を、従来世に伝われる妖怪中より除去せば、真に妖怪として残るべき事実は実に少なからん」²³と言えるのであり、それはこれに続いて論ずる「妖怪宅地」への

伏線ともなっている。

では、「妖怪宅地」とはどのような現象なのであろうか。円了はまず「妖怪宅地」とは、いわゆる化け物屋敷のことにして、これに関する古来の伝説すこぶる繁多なれば、いちいち枚挙するにいとまあらず。今日といえども、しばしば諸方におこる所の物たることは、各地方より予輩に報道せらるる事実、年々一、二にとどまらざるをもつても知らるべし」(24)と述べ、その原因の調査について、(一)妖怪の原因を鬼神・狐狸に求めずに、人に求めること、(二)これを家宅の外にのみ求めず、中にも求めること、(三)原因を男子・大人のみに求めず、女子・児童にも求めること、(四)形の上にだけ原因を求めず、心にも求めること、という具体的な調査の指針を列挙している(25)。さらに円了によれば、「妖怪宅地」は甲・乙という二種類の現象が考えられる。まず甲とは、石盆や茶碗の類が空中に浮き上がり、物品の位置が変わったり、なくなったりすることであり、姿は見えない。これに対して乙とは、亡霊や怪物の姿・形が具体的に見えるものである。円了はその上でまず姿を見せず、一見正体がわからない甲について、一二の事例を挙げているが(26)、ここではそのうち、二つの事例を見てみよう。

明治二十三年冬ごろのことなりしか。和歌山県名草郡四ヶ鄉村字松島と名付くるところに、野中某といえる者の宅に怪事起これり。朝夕昼夜を論ぜず、飯をたかんとせば釜中に灰を投入しあること、家内の食事をなし残飯あればことごとく食い尽くすこと、井中に石灰油その他のものを投入しあること、鍋、釜、壺の類を便所へ持ち運びあること、主人が用心のため褥下に隠しおきたる金入れが、便所の大便中に投入しあること、近隣のもの、経験のため饅頭を戸棚中にかくしおき、その戸を鍵をもって密閉しおくに、その物を取り食らう等ありしも、だれもその理を解せず。世評にては狸の所為なりと唱えり。一日、近傍のもの、その怪

を検せんと欲してその家に至り、主人と相語りおりし間に、たちまち頭上に灰を降らせり。その人大いに驚きて立ち去れりという。予、この報道に接して数日を出でずして南海道一周の途に上り、和歌山に滞在中、実地見聞せんとてそのことをたずねたるに、当時すでにその家の少女が精神病にかかりて、これをなしたることを発見せりと聞けり。これ、人為的妖怪の好適例なり。

また、明治二十三年十二月十八日夜、栃木県栃木町、大塚某屋上より俄然石を投ずるものあり。驚きてこれを検するに人影も見えず、夜明くればすなわちやむ。爾来、毎夜同様にて二十一日間の長きにわたりてやまず。その投げ方は人の投ぐると異なりて、上より降下せず持ちきたりて置き、あるいはカラカラと転がすがごとし。あるときは木戸をたたきて「今晚は」と呼ぶ声あり。出でてこれを見れば、突然、大石を投じて怪物は隻影をとどめず。近辺にては一般に貉の所業なりといえり。その証拠には、その家の隣家の裏に貉の穴あり。これをふさぎたるより数日を出でずしてこの件起こる。また、近傍に貉の毛の落ちたるを見たり。また、現に貉の形を見たるもの二人あり。かつ僧侶の祈禱によれば、五十余年を経たる貉なりと告げたり等の例によりて明らかなりといえり。かくのごとき例証によりて、貉なりと断定するは、憶測の最もはなはだしきものなり(27)。

円了はまず和歌山における事例については、実際に確認を試みたが、すでに事件は解決していたことを明言している。それは先の「人為的妖怪」の諸原因に照らせば、家族の精神病(癲狂)によるものであり、当時、近隣の者たちがそれなりに原因究明を試みていたことにも触れている。ただ、ここで注意すべきは、釜や井戸に突然

異物が混入されたり、頭上から灰が降るような事象をこの土地の者は化け狸の仕業と考えていたことである。円了によれば、そうした判断は事の原因を家の外にのみ求めることであり、結果的にその真の要因の探索を遅らせることになるのだが、家人や近隣住民も、様々に試してようやくその原因にたどり着いたのであろう。そしてこのことは次の栃木における事例についても指摘することができる。ここでは二十一日間にもわたる怪現象を土地の者が貉の仕業と同定していることがわかる。それは円了によると貉の毛が落ちていたとか、僧侶の祈禱といった怪しげな状況証拠でしかないが、和歌山の事例と異なりこれが記録された時点で結論は出ていない。円了もちろん言外にこれもまた人の仕業だと言いたげである。

ここで留意しておきたいのは、この和歌山と栃木の「妖怪宅地」において、その「場所」が明確に問題になっていることである。この場合、「場所」とはまず端的に「妖怪宅地」のその現場となっている特定の土地だが、それは同時に周囲環境も含めて、狸や貉が信憑されている空間である。「妖怪宅地」論の冒頭で円了が示唆している調査の方向とは逆に、事例の当事者たちは、その家の内部に眼を向けるのではなく、外部に向けた。そこは「外」とは言っても、化かす獣たちが跳梁すると信じられている特定の意味空間である。前節で言及した高木に従えば、この狸・貉の化かしが信憑されるのはマチと山に挟まれた里である。しかし同時にこの「妖怪宅地」は近代的なマチの怪異の形態でもある。その意味空間の内的連関によって事象に対する整合的な解釈を編み上げる時に、かえって、見えるはずの家の内の人間関係の事情や建築の状態が「見えなく」なっているのである。円了はそうした点へとまず注意を促す。円了は事例の列挙に続けて自らも調査に携わった明治二十五（一八九二）年に発生した東京駿河台西紅梅町五番地の久保清右衛門方で発生した「白狐」の事件の経過と、下女による腹話術であったことが露見するその顛末を述べ²⁸、さらに『稻生物怪録』によって知られる広島県三次における寛延二（一七五十）

年旧曆七月に発生した怪異の記録などを引照したのち、「妖怪宅地」の原因について次のように述べる。

そもそも妖怪宅地のごときは世間の風評が原因となりて、人の精神作用を動かし幻覚、妄覚を起こさしむるものなり。余は府下の二、三の妖怪宅地と唱うるものを見たることありしが、一つは、先年その家にて人を殺し、あるいは自害したることのごとき、不吉不詳の事情ありしを原因として妖怪宅地の名を得るに至り、一つは、その家が近隣より憎まれ、あるいは怨恨を受けて、ためにかかる風評を起こさるるに至り、一つは、その家の構造、間取りなどがなんとなく陰気にて、白昼なお薄暗きようなる事情、もしくはその家が久しく人の住居せざりし事情より起こる。あるいはその家に住みたるもののめぐり合わせ悪くして、病人、死亡の引き続きたることありしを原因として悪風評を伝うるに至り、その後これに住するものは、精神作用によりて種々の妖怪を自らつくり出だすによる(29)。

和歌山と栃木における事例は、前者は家族の心の病によるものであり、後者もまた人の仕業と推定できるものであった。また、駿河台の「白狐」事件には下女が関わっていた。これらは人為的妖怪の諸原因の一つである精神病や遊戯によるものと言えるだろう。しかし同時にそれは「化かす動物がいる」という信憑に支えられていた。ここで円了が論じている「妖怪宅地」には、新たに「かつてそこで人が死んだ」という記憶が介在している。もちろん人為的妖怪の原因でもある仇恨の要素も含まれており、この場合は周囲の人間がその土地に住む者を貶めようと風評被害をもたらしたと言えそうだが、この場合も噂を聞く人間がそれを信じるようなものでないとならない。円了は「妖怪宅地」の具体的な間取りにも言及し、「なんとなく陰気にて、白昼なお薄暗き」と述べている。

この「なんとなく」が、かつてそこで人が不幸の死を遂げたことや、病人が絶えなかったという記憶と結びついているのだ。ここでは里の狐狸・貉は登場しない。あるのは「人が死んだ」ということであり、より一層マチの化け物屋敷に近づいている。円了が訪れたのが当時の東京府下であるということも注意してよいだろう。

ところで、宮田登は『妖怪の民俗学』（初版一九八五年）において円了による事例も参照しながらやはり「化物屋敷」における下女の介在に着目し、「土地とか家にこもっている霊を引き出す役割を下女が行っていることになる」³⁰と述べている。「土地とか家にこもっている霊」とは何か。日本各地の「皿屋敷」伝承に依りながら、宮田は「古い城下町が開発されていく過程で、土地の持っている霊、つまり土地霊があり、開発される過程で、人間の行ってきた土地開発に抵抗する」³¹のだと指摘している。つまり、その土地において発現する矛盾が下女という存在に凝縮されるのである。その土地の持つ記憶と周囲の風評、そして介在する人間の心の病や遊戯心という揺らぎが、「妖怪宅地」という現象を立ち現れさせているといえよう。

もちろん円了は「霊」の存在を認めないが、それよりも説得力を持つ説明原理として持ち出すのが地理的空間と人が出会う「記憶」なのである。「第八 雑部門」においては「妖怪宅地」に続き「第二講 怪物編」に産女や船幽霊、轆轤首、通り物とならんで「河童」がテーマとなっているが、円了がこの記憶という要因をふたたび前景化するのがこの「河童」の解釈である。そこではまず『和漢三才図会』『善庵随筆』『百物語評判』『怪談御伽』『庄内可成談』といった百科事典類や随筆・説話集から事例が紹介され、それらを受けて「これを要するに、今日伝うるところの河童談の起源は、今、明らかに知ることが難しいえども、いずれなにか偶然の出来事ありて、それを伝唱する間に種々の妄説を付会せしより起こりしもの」³²なのであり、「古代よりすでに河童の伝説ありて、それを記憶しおるをもつて、その思想の専制、予期より幻覚あるいは妄覚を起し、たまたま水中に一物あるを見

て、たちまちこれを河童と誤認し、それより、あるいは道に河童を見たりとか、または河童と闘いたりとかいい伝うることもある」³³こととなるのである。「河童は偶然の出来事に由来する」ということを説明するために、古代よりあるその伝説の「記憶」がここで持ち出されている。その「記憶」が「水中」という特定の場所に重ね合わされる時に、河童が立ち現れるのである。

この「第六 雑部門」には「雑」であるところのもろもろの妖怪現象について、総体的なその構造の説明はなされず、「第二講 怪物編」に続く「第三講 妖術編」においても「火渡り」や「糸引き」といった個々の事例に即した説明がなされるのみで、やや唐突に全編が終わる感があるが、それだけに、「妖怪宅地」の詳細な解釈と、それに続く次のような「心」の解明は、河童の事例における「記憶」の重視と合わせて、複合的な妖怪現象に対する円了の構造的な把握を端的に示しているものと言えよう。

ゆえに、世に妖怪の府庫と称すべきは人類の心のみ。その作用の奇変、殊妙なること実に驚くべし。すでに人心そのものの妖怪なるを知らば、世に妖怪の魁首は、鬼にあらず、神にあらず、狐にあらず、人なることを知らざるべからず。かつ、世に最も恐るべきものも、鬼神、狐狸にあらずして人なることを知るべし。もし、さらに人心そのものの妖怪なるゆえんを尋究するときは、さらに一大妖怪のその根基となるを知るに至る。これ、余がいわゆる真怪にして、世間通俗の千妖万怪は皆これより出ず。これによりてこれを見れば、人心は実に真怪に通ずるの門路にして、また真怪その光影をもらす窓隙なり³⁴。

これを単純に円了の啓蒙的姿勢とのみ読み取ってはならないだろう。「雑」、すなわち複合的な妖怪現象におい

ても、多重的な構造が見られることを円了は述べている。そのことと前節で触れた経験の地平構造を重ねて考えてみよう。人間存在は特定の場所に「於いてある」。その場所は生活上の有意義な連関の地平によって区切られている。すなわちその地平の内部においては、あらゆるものが特定の意味の相を持って現れ、そこで異様な経験が出来るとしても、その意味地平の内部で解釈される。「妖怪宅地」における狐狸や貉といった諸存在は、そうと名付けられた時点でこの有意義な連関にとりこまれる。ところが、そのことによって、当該の経験において立ち現れているはずの地平の彼方が見えなくなってしまう。円了が「妖怪宅地」の調査において家屋の外部よりも内部を、男性よりも女性や子どもに留意するように示唆したのは、この日常的な地平において遮蔽され、当たり前であるがゆえに見えなくなってしまう地平の彼方に目を向けさせるためである。それでは、この場合の「地平の彼方」とは何であろうか。それが人間のいる場所が、その地平に開かれているもう一つの「場所」の名前なのだが、それが「心」であり「記憶」なのである。そのため、「心」は「千妖万怪」の根基なのである。この「心」は個体としての個人の内部に開かれた「心」ではない。「真怪」としての「場所」の名である。「人心」はこの場所に開かれた区切られた地平内の場所であり、地平の彼方としての外部に開かれつつ、閉ざされている。すなわち、地平の内部においては、外部は忘却されやすいのである。しかしそれは忘れ去られているわけではない。それが「記憶」となって地平内を侵襲する時に、「妖怪宅地」や「河童」のような妖怪現象が立ち現れると考えられるだろう。

換言すれば、複合的な妖怪現象は、この二重の場所を折り畳んで立ち現れるのである。それでは、円了以降、こうした妖怪現象をめぐる「場所」の洞察はどのように展開されたであろうか。

3. 妖怪研究における「場所」と「身体」

柳田國男が『妖怪談義』（初出一九五六年）の冒頭においた同名のエッセイである「妖怪談義」（初出一九三八年）において、「妖怪」（オバケ）と「幽霊」の区別をしたことは広く知られている。それは「誰にも気のつく様なかなり明瞭な差別が、オバケと幽霊との間にはあつたのである。第一に前者は、出現する場処が大抵は定まっていた。避けてそのあたりを通らぬことにすれば、一生出くわさずに済ますことも出来たのである」³⁵という指摘から始まり、妖怪はその場所に出るから相手を選ばないのに対して、幽霊は恨みを持つような特定の相手を狙う、そして幽霊は丑三つ時という真夜中に出るのに対して、妖怪は宵と晩の薄明かりに出ると両者の特徴が述べられている。しかし第一節で高岡による高知の調査に触れたように、近代においては幽霊もまた特定の場所に出るし、さらに前節で円了の「妖怪宅地」論を通して検討したように、その原因の一端はマチにおける特定の宅地において死者が出たという「記憶」によるのだとすれば、この柳田の分類は妥当しないだろう。ただ、注目すべきは、このエッセイと同時期に柳田が後世に「妖怪辞典」として評価される「妖怪名彙」（初出一九三八～一九三九年）において「妖怪」の分類を試みていることである。それは八十種類の妖怪種目（固有名）がカタカナ表記によって簡単な解説とともに記されたものであるが、その冒頭に柳田は次のようにその目的を語っている。

怖畏と信仰との関係を明らかにしてみたいと思つて、いわゆるオバケの名前を集め始めてから、もう大分の年数になる。まだ分類の方法が立たぬのも、原因は主として語彙の不足にあると思うから、今少し諸君の記憶にあたつてみたい。あるいは時期がすでに遅いかも知れぬが。

分類には二つの計画を私は持っている。その一つは出現の場所によるもの、これは行路・家屋・山中・水

上のおおよそ四つに分けられる。行路が最も多く、従ってまた最も茫漠としている。第二には信仰度の濃淡によるものだが、大体に今は確信する者が稀で、次第に昔話化する傾向を示している。化物があるとは信じてないが話を聴けば気味が悪いというものがその中間にいる。常の日は否認していて、時あつて不思議を見やや考え方が後戻りをするものがこれと境を接している。耳とか目とか触感とか、またはその総合とかにも分けられるが、それも直接実験者に就けないのだから、結局は世間話の数多くを、おおよそ二つの分類案によつて排列してみるの他は無い(36)。

柳田はここで二つの分類案を掲げている。その一つは「場所によるもの」であり、文字通り行路・家屋・山中・水上というように、物理的な環境としての場所が指定されている。もう一つの「信仰度の濃淡」についてはこの「妖怪名彙」に拠るかぎり分明ではない。また柳田がここで「耳とか目とか触感」による体験をする「直接実験者に就けないのだから」と諸感覚に分類の可能性を示唆していることも読み取れるだろう。香川雅信はこの「妖怪名彙」について、妖怪として列挙されているのは特定の「存在」ではなく、何らかの怪しい「現象」であるという点に着目し、これを「妖怪」の名彙ではなく、共通する現象を並べた「共同幻覚 (hallucination collective) 名彙」として捉えなおす可能性を示唆している。それによると、「シヅカモチ」から「コソコソイハ」までは「音の怪異」、「オクリスズメ」から「シャクシイハ」までは「路上の怪異」、「ヒトリマ」から「カネノカミノヒ」までは「火の怪異」、「ヤギョウサン」と「クビナシウマ」は「行幸する怪異」として括ることができ、「路上の怪異」のサブカテゴリーとして、後をついてくる・足に絡みつく・転がつてくる・上から下がつてくる・行く手を遮る・伸び上がる・呼びかけるといように分けることも可能だとする(37)。

音の怪異	シズカモチ・タタミタタキ・タヌキバヤシ・アズキトギ・センダクギツネ・ソロバンボウズ・コナキジジ・カイフキボウ・コクウダイコ・カワヅツミ・ヤマバヤシ・タケキリダヌキ・テングナメシ・ソラキガエシ・フルソマ・オラビソウケ・ヨブコ・ヤマノコゾウ・イシナゲンジョ・シバカキ・スナカケババ・スナマキダヌキ・コソコソイワ
路上の怪異	オクリスズメ・オクリイヌ・ムカエイヌ・オクリイタチ・ベトベトサン・ピシャガツク・スネコスリ・アシマガリ・ヤカンザカ・テンコロコロバシ・ツチコロビ・ヨコヅチヘビ・ツトヘビ・タンタンコロリン・キシンボウ・ツルベオトシ・フクロサゲ・ヤカンヅル・アブラスマシ・サガリ・ヌリカベ・イッタンモメン・ノブスマ・シロボウズ・タカボウズ・シダイダカ・ノリコシ・オイカガリ・リビアガリ・ミアゲニューウドウ・ニューウドウボウズ・ソデヒキコゾウ・オイテケボリ・オッパシヨイシ・シャクシイワ
火の怪異	ヒトリマ・ヒラカセ・ミノムシ・キツネタイマツ・テンビ・トビモノ・ワタリビシャク・トウジ・ゴツタイビ・イゲボ・キカ・ケチビ・イネンビ・タクロウビ・ジャンジャンビ・ボウズビ・アブラボウ・ゴンゴロウビ・オサビ・カネノカミノヒ
行幸する怪異	ヤギウサン・クビナシウマ

図① 柳田國男「妖怪名彙」(1838～1939)における「妖怪」(共同幻覚)の分類
(香川論文 2012 による)

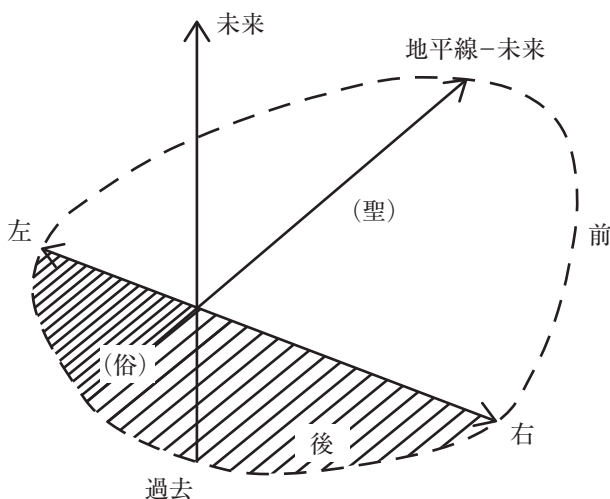
さらに「妖怪名彙」について、香川は、これらが「何れも感覚的なものへの訴え方による分類になっている」³⁸⁾ことに注意を促している。柳田は「直接実験者」に聞けないということから、耳・目・触感などという分類はしていないはずだが、それでも世間話から怪異・妖怪の立ち現れの原態を復元しようと試みていると考えられるだろう。そのため実のところこの「妖怪名彙」には「天狗」や「河童」や「鬼」といった固定化された姿形を明確に思い描くことができる「妖怪」は記されていない。たとえば「コクウダイコ」はどことも知れず太鼓の音が聞こえることであり、「ノブスマ」は壁のように立ちはだかるという現象である。そしてこれらの現象と音を聞く(聴覚)、火を見る(視覚)、絡みつく(触覚)といった「身体」の感覚が密接に結びつい

ている。

だがその一方で、「妖怪名彙」の分類基準には疑義も呈されている。『妖怪談義』の解説において小松和彦は出典に遡ったその資料批判的検討を行い、たとえば「タタミタタキ」の項目における「土佐ではこれを狸の所為としている」⁽³⁹⁾という柳田の記述に着目しながら、「すなわち、妖怪を分類するさいには、怪音現象による分類と妖怪存在による分類は、その基準が異なるものとして、区別されなければならないのである」⁽⁴⁰⁾と指摘する。すなわちこれは、出来事としての怪異現象のレベルと、それを引き起こす原因とされる妖怪存在のレベルを識別しようとするのだらう。小松はこの柳田批判に続けて、縦軸に様々な妖怪存在を並べ、横軸に怪異現象を並べて、交差する欄に呼称を記述するという新たな分類案を提示し⁽⁴¹⁾、別の論考では、眼（視覚）・耳（聴覚）・皮膚（触覚）・鼻（嗅覚）・舌（味覚）による「怪異」の五分類を試みている⁽⁴²⁾。

柳田の「妖怪名彙」以降の試みに眼を転じた場合、民俗学研究所編の『民俗学辞典』（一九五一年）の「妖怪」の項目では「妖怪出現に際して、冷たい風が吹く、生臭い匂いがあると、四辺が暗くなるなどの異常な雰囲気とか、出現に際して寒気がするとか総毛立つなどといった共通した心理変化はもっと注目されるべきである」⁽⁴³⁾と身体や諸感覚の変容に注意が促されながらも、総体としては（一）山の怪、（二）路傍の怪、（三）家・屋敷の怪、（四）海上・海中・海岸の怪、（五）川の怪、（六）巡回する妖怪、（七）その他というように、環境としての場所をやや精緻に分類するにとどまっている⁽⁴⁴⁾。柳田は「妖怪」の分類において、可能な限り「実験者」の原態に戻ろうとし、そのために人間の身体を前景化することを試みたが、その場所的性格について考察するに至らず、その出現する環境に定位された場所ということを優先させてしまったのだらう。

それでは、柳田以降の妖怪研究において、この「場所」と「身体」との関係はどのようになっていであろう



図② トゥアンによる直立した人間から見た空間の意味づけ（佐々木『怪異の風景学』より）

か。佐々木高広は人文地理学者であるイーファー・トゥアンの研究に依拠しながら、直立した身体的位置と、怪異の風景との関係を探っている。トゥアンによれば、人間の身体は地球上の空間を占有して成立しており、直立した人間をモデルとした場合、上・下、左・右、前・後というように分節される。そして、頭的位置より上方の空間である「上」は上流や上層というようなプラスの意味、足より下方の空間は下等、下層などというようにマイナスの意味をおび、上、前方、右にプラスの、下、後方、左にマイナスの意味世界が広がっているとしている⁽⁴⁵⁾。

こうした身体の分節に従った場合、大内裏を中心に、都の東側を左京、西半分を右京と呼び、天皇の身体から見る視点に支えられていた平安京において、「百鬼夜行」などの怪異が生じる一条大路は後方になり、神泉苑は前方だが左方になる。つまり、身体（ここでは天皇の身体を見立てた場合）の背中側と左側が、怪異発生空間となるのである⁽⁴⁶⁾。こうしたことは、上方落語で語られた近世の大阪における怪異の場所が船場を中心にその東

南方向に偏っていることや、江戸城を中心にして見た場合、怪異空間がその東南あるいは北に偏向することによっても傍証される⁽⁴⁷⁾。ここで注目すべきことは、都市空間と身体を重ね合わせ怪異・妖怪が立ち現れる「場所」について考察していることである。そして、身体の中側と前方が非対称的な意味を帯びていることにも留意しておいてよいだろう。柳田において環境における特定の場所と、生起する身体感覚の分節が整合していなかった怪異・妖怪の分類は、その両者の重合の可能性へと展開しているのである。

このような身体の方節に基づいた怪異・妖怪の分類を身体側に特化してさらに究明しているのが安井真奈美の研究である。安井は国際日本文化研究センターによる怪異・妖怪伝承データベースの事例三五七〇一件を身体各部位の名称をもとに検索し、それと怪異・妖怪の相関関係を分析している⁽⁴⁸⁾。それによると、事例件数として多いのは人体の開口部としての目・耳・鼻・口となる。例えば一つ目小僧の起源説に見られるように目は潰され、耳は市の予兆を聞いたり、もぎ取られたりする。鼻は悪霊が出入する場所となり、口はデータベースの八割近くを口が耳まで裂けた口裂け女に関するものだとしている⁽⁴⁹⁾。さらに安井は哲学者である鷲田清一の見解を援用し、「顔と背中では、自ら目視のできない「ブラック・ボックス」となった身体部位である」⁽⁵⁰⁾と述べ、狐や狸に乗り移られやすいのが背中であることや、生まれ変わりを証する文字が浮かび上がりやすい部位であること、そして背中から魂が抜けやすいことや、後ろに乗せていたはずの客がいなくなり、ふり向くとシートがぐっしり濡れていたといったタクシードライバーの怪異譚などの事例を紹介している⁽⁵¹⁾。身体の中側と顔はともに自分では見ることができないが、それゆえに怪異・妖怪の立ち現れの現場となりやすい場所であることがここからうかがえる。

では、柳田以降の妖怪研究のこうした諸動向と、経験の地平構造と関連した「場所」論を重ねた時に、そこに

どのような構造があると考えられるであろうか。柳田は周囲に広がる物理的な環境世界を「場所」と同定し、「妖怪は場所に出る」と規定したが、その場所は同時に、何かが見えたり、聞こえたり、感じたりするというような身体と 관련된 場所でもあった。この「身体」と「場所」を重ねると、その前方は明るく、後方は暗いといった意味空間が立ち現れる。すなわち人間は五感のうちで視覚を発達させているために、目で見える前側は明るく、目視できない後ろ側は不安な空間になるという非対称的な関係が生じるのである。経験の地平構造に即していえば、開けである場所は暗く、かぎって開かれる場所である日常的な空間は明るいということになるであろう。人間の「於いてある」日常的な場所と、「於いてある」その場所があるもう一つの開けは、他ならぬ人間からは「見えない」ということにおいて、非対称性をなすのである。しかし、「見えない」けれども、「感じられる」ということにおいて、実は身体にはもう一つの非対称的な場所がある。それが安井が指摘する身体の開口部である。たとえば目は自分で見ることができないが、そこからの視野の開けを持つことで我々は日常生活を行っている。その目が潰されることは、その開けが開けていたことを当たり前のように改めて気づかせるがゆえに、恐ろしいのである。円了が「心」にその場所を見出し、柳田によって「場所」に出るとして規定された妖怪現象は、その後の諸研究を通して「身体」という「場所」に問いが収斂してきているように思われる。では、このように考えた場合、妖怪が立ち現れる「場所」の構造はどのようなになっているであろうか。

4. 妖怪現象の「場所」論的構造

「妖怪は場所に出る」。これだけならば、何の珍しいことはない。前節において検討してきたように、まずこの視点を掲げたのは柳田國男であり、しかもその説は、第1節でも触れたように、「どこにでも出る幽霊」の事例に

よって（妖怪と幽霊の区別も含めて）今や反証されている。しかし、「妖怪は場所を折り畳んで立ち現れる」と筆者は本論の冒頭に述べた。あらためてこれはどういうことなのか。経験の基本的な地平構造を振り返ることから再考してみよう。

経験の地平構造とは、さしあたっては、我々人間のいる場所が二重であるという洞察である。この場合、場所とはまず我々が「於いてある」場所のことである。我々はいつもとどこかに「いる」。たとえば家の中や町の中、学校や職場の中など。その周囲には物理的な空間が広がり、我々はそこで一定の空間を占有しているとイメージされている。このことはしかし、「地平」というように、我々のその「於いてある」場所はその彼方を持つことも意味する。たとえば、海岸に立って大海原を見晴るかす場合を想起するとわかりやすいだろう。彼方には水平線があるが、水平線の向こう側は、こちら側からは「見えない」。そのように、我々が日常そこで過ごしている場所は、その内部で様々な意味的な連関を持ちながらも、ある地平において「こちら側」からは閉ざされていると言える。たとえば我々は会社にいるが、会社は国土の中にあり、国土は地球の一定の空間を占めるといった、物理的空間ならば分かりやすい。けれどもここでいう「地平」の「向こう」としての場所とは、そのような人間・会社・国土・地球が「於いてある」という形で開かれた、それ自体は形を持たないもう一つの「場所」のことなのである。そこで、前述したような人間の「於いてある」場所とは、このもう一つの場所からは、開かれつつ区切られ、区切られつつも開かれているように見える。先の水平線の例をあげれば、海岸にいる人の場所からは、その水平線は視界を区切っているように見えるが、同時にその水平線はその彼方へと開かれている。これが「区切って開き、開きつつ区切る」という場所の二重性である。

それでは、こうしたことが妖怪の立ち現れとどのように関係してくるのだろうか。

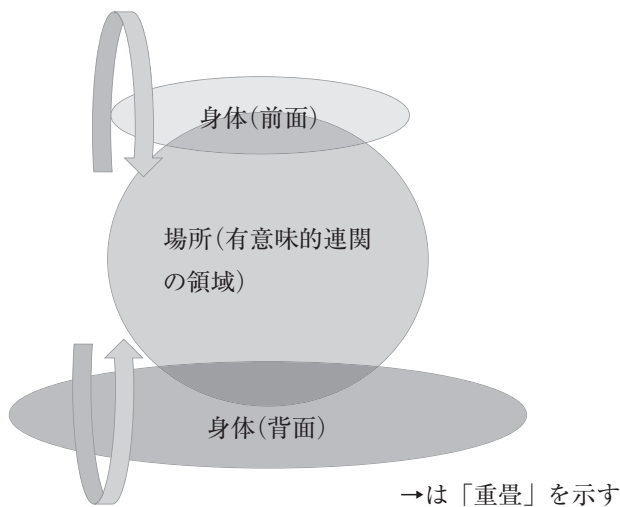
円了は「妖怪宅地」の調査において、その指針として家屋の外部のみではなく内部にも原因を求め、男性のみになく女性・子どもも注視するように促していたが、それは日常の慣れ親しんだ場所であるがゆえに、かえってそれが置かれている有意味な諸連関が見えなくなっているからであった。「妖怪宅地」に介在した家族の一員の心の病にしろ、下女の愉快犯的行為にしろ、そうした日常の場所の盲点を襲った出来事であろう。しかしそれはまた同時に、その「妖怪宅地」がある近辺の土地における狐狸などの動物が化かすという信憑がなければ、生じえないことであった。円了はこのような一見不思議が起る場所を「心」と呼び、それがあらゆる世間的な妖怪の根源であると指摘するとともに、「河童」伝説が生じるような特定の場所の「記憶」と結びつける。すなわち、心とは開かれつつ区切る場所として、妖怪の発生場所となると同時に、区切って開かれる場所としては、「真怪」への通路となるのである。

柳田の場合、この場所は具体的にはたとえば路傍や家屋、水上として指定できる一定の空間としてまずは考えられることは、先に指摘したとおりである。しかし同時に柳田はそうした分類案において、身体の諸感覚に着目した。その場合、「シヅカモチ」や「アズキトギ」のような怪音現象は、行路において出逢われることであると同時に、耳によってききとられるものにもなる。こうした身体に定位した研究として、佐々木はその前方と後方の差異に着目している。ここでは、円了において明確に分節されず、柳田においても問題提起にとどまった「身体」という「場所」が浮上してきている。すなわち、空間としての場所と身体には妖怪現象の立ち現れに即してみても密接な相関があるのである。そのことは、安井が身体部位そのものに着目し、とりわけ顔と背中との非対称性と開口部が怪異・妖怪の発生場所となることを確認したことにおいて、顕著であると言える。

では、この身体と場所とは、妖怪現象の立ち現れとどのように関係してくるであろうか。まず注目したいのは、

身体の背面と前面の性格である。この両者は、ともに自分からは見えないが、他人からは見えるという本質的契機を持つ。すなわちこの両者はまさに身近に感じることのできるものでありながら、日常的な生活の地平の「彼方」にあるのである。そんなはずはない。背中も顔もあるじゃないか、とこでもし考えらしたら、それは我々が生まれ育った中で自然に取り入れてきた想像的な他者側の視点を、無自覚に受け入れてしまっているのである。ここで重要なのは、背中も顔も「見えない」ということが、地平の区切りとパラレルであることである。もし、背中と顔において他者と出逢われるとしたら、その他者は「地平の彼方」なのだ。このことは同時に、身体の開口部が怪異・妖怪の立ち現れの場所となることも解明する。「穴」とは、そこから何かが開けている空間であろう。たとえば口が耳まで裂けた口裂け女が恐怖をもたらすのは、その開口部の異常が、自身の生の領域を身体の内側から侵犯するように感じられるからであり、背中に狐狸が取り憑くことが恐ろしいのは、「見えない」はずの他者側の視点の場所が、「見える」ような形で自身の身体の中に入り込んでしまうからである。身体の前と背面とは、このように他者の視点を介して捻れているのである。

そしてこのことが、「身体」の「場所」的性格を証することになる。「場所」とは「見えない開け」と「区切られて見える」意味連関の世界の二重構造を意味するのだった。身体においてこの二重性は、自己側からは見える前方の知覚空間と、自己側は「見えず」、他者側からは見える背中と顔となつて現れる。妖怪現象はたしかに場所において立ち現れるが、その場所も二重となる。すなわち地理的な空間としての場所（たとえば路傍や家屋など）と、身体としての場所（前面と背面）である。しかしこの場所の二重性は、妖怪現象に出逢った人間からは「見えない」ものとなる。それは地理的空間と身体がその二重性を隠して折り畳まれたところで、経験されるのである。その構造を図示すれば、図③のようになるだろう。



図③ 妖怪現象の「場所的」構造

ここで、本論の冒頭に触れた拡張現実（AR）と都市伝説の話題に戻ってみよう。ARとは、デジタルデバイスを介在させて、人間の視聴覚知覚を環境情報に重畳させることだった。ゲーマーや子どもたちは「妖怪のしわざ」であるとされる擬似自然の出来事を「妖怪レンズ」を通して視覚化し、またはその場所にいないはずの「ポケモン」を探して地理的空間を彷徨する。ARの機能は、実際に「見える」はずの場所に「見えない」空間を重ねることによって、「見える」ものまでも「見えず」してしまうのである（それゆえ、ゲームをめぐる衝突や不法侵入、交通事故などが起きる）。また都市伝説の場合、近世から近代へのマチの空間の発達に伴う幽霊の増殖や、携帯やネットを通じたその「非・場所」化と指摘される事態にしても、反面において怪異が「どこにでも起こる」ということを意味するのではないだろうか。その場合やはり、「見えない」空間を「見える」ように折り畳み、「見える」ものまでが「見えず」なるという現象が生まれている。つまり、ARや都市伝説においても、場所は折り畳まれているのである。

このようなことが、何を意味するのだろうか。怪異・妖怪現象は社会的な啓蒙や迷信退治によっては、なくならないのではないか、ということである。それらは絶えず形やあり方を変えて、「見えない」場所の二重性を逆手にとって立ち現れる。このことは科学技術が発達し、相対的に人々の教養が増進しても、人類の叡智が無力であるということの意味しない。なぜなら、身体の前と背面という場所をめぐる不可視性は、人間であることの条件の一つをなすからである。これをもし錯覚であるとするならば、ほとんど人類種に必然的な錯覚と言えるだろう。我々のなしうることは、この錯覚を問わずに迷信を増殖させることでは無効である。現在、我々の知りうる世界・場所が開かれつつ区切られていることを自覚し、その意味において、妖怪現象の本質である「真怪」という不思議に眼を閉ざさずにその通路に触れ続けること、円了の妖怪学を現代において継承しようとすれば、それが課題となるのではないだろうか。

【註】

- (1) 中川大地『現代ゲーム全史——文明の遊戯史観から——』早川書房、二〇一六年、五二二頁参照。
- (2) 産経WEST「ポケモンGO配信で日本配信一ヶ月で初の死者」(<http://www.sankei.com/west/news/160824/wst1608240073-n1.html>) / 「二〇一六年十一月十五日アクセス」
- (3) 中沢新一『ポケットの中の野生——ポケモンと子ども——』新潮文庫、二〇〇四年、九五—一〇四頁参照。
- (4) 中川大地『現代ゲーム全史——文明の遊戯史観から——』早川書房、二〇一六年、五一四頁。
- (5) 前掲書、三九〇頁。
- (6) 宇野常寛『リトル・ピープルの時代』幻冬舎、二〇一五年、四四四頁。
- (7) 高岡弘幸「幽霊の変容・都市の変貌——民俗学的近・現代研究に向けての試論」『国立歴史民俗学博物館研究報告』

- 第一三二集、二〇〇六年、一〇二頁。
- (8) 前掲論文、一一一—一二四頁参照。
- (9) 米津海「インターネット都市伝説の架空性と領域」『人間文化学部学生論文集』第一三三号、京都学園大学人間文化学科、二〇一五年、一八〇頁参照。
- (10) 上田閑照「経験の場所——見えない二重性——」『哲学コレクションⅡ 経験と場所』岩波書店、二〇〇七年、一八一頁。
- (11) 前掲書、一八四頁。
- (12) 井上円了『妖怪学講義(緒言 総論)』『井上円了選集』第一六卷、東洋大学、一九九九年、二二頁。
- (13) 井上円了『妖怪学講義(緒言 総論)』前掲書、二三頁。
- (14) 井上円了『妖怪学講義(緒言 総論)』前掲書、二四—二五頁。
- (15) 拙稿「円了妖怪学における「真怪」の構造」『国際井上円了研究』第二号、二〇一四年、二五〇—二七〇頁参照。
- (16) 井上円了『妖怪学講義(緒言 総論)』『井上円了選集』第一六卷、東洋大学、一九九九年、五九頁。
- (17) 井上円了『妖怪学講義(緒言 総論)』前掲書、一七〇頁。
- (18) 井上円了『妖怪学講義(第二 理学部門)』前掲書、五〇二頁。
- (19) 井上円了『妖怪学講義(第六 宗教学部門)』『井上円了選集』第一八卷、東洋大学、一九九九年、六六頁。
- (20) 井上円了『妖怪学講義(第八 雑部門)』前掲書、五二三頁。
- (21) 井上円了『妖怪学講義(緒言 総論)』『井上円了選集』第一六卷、東洋大学、一九九九年、二八三頁。
- (22) 井上円了『妖怪学講義(第八 雑部門)』『井上円了選集』第一八卷、東洋大学、一九九九年、五二三—五二八頁参照。
- (23) 井上円了『妖怪学講義(第八 雑部門)』前掲書、五二八頁。
- (24) 井上円了『妖怪学講義(第八 雑部門)』前掲書、五三〇頁。
- (25) 井上円了『妖怪学講義(第八 雑部門)』前掲書、五三〇頁参照。
- (26) 井上円了『妖怪学講義(第八 雑部門)』前掲書、五三二頁参照。
- (27) 井上円了『妖怪学講義(第八 雑部門)』前掲書、五三七—五三八頁参照。
- (28) 井上円了『妖怪学講義(第八 雑部門)』前掲書、五四二—五五六頁参照。
- (29) 井上円了『妖怪学講義(第八 雑部門)』前掲書、五八〇頁。

- (30) 宮田登『妖怪の民俗学』筑摩書房、二〇〇二年、八九頁。
- (31) 前掲書、四七―四八頁。
- (32) 井上円了『妖怪学講義(第八 雑部門)』『井上円了選集』第一八卷、東洋大学、一九九九年、六三八頁。
- (33) 井上円了『妖怪学講義(第八 雑部門)』前掲書、六三九頁。
- (34) 井上円了『妖怪学講義(第八 雑部門)』前掲書、六〇六頁。
- (35) 柳田國男著・小松和彦校注『新訂 妖怪談義』角川学芸出版、二〇一三年、一八頁。
- (36) 前掲書、二四三頁。
- (37) 香川雅信「柳田國男と妖怪・怪談研究」『日本民俗学』第二七〇号、二〇一二年、一七三頁参照。
- (38) 香川前掲論文、一七三頁。
- (39) 柳田國男著・小松和彦校注『新訂 妖怪談義』角川学芸出版、二〇一三年、二四四頁。
- (40) 小松和彦「解説」(柳田國男著・小松和彦校注『新訂 妖怪談義』角川学芸出版、二〇一三年)、三三〇頁。
- (41) 前掲書、三三一頁参照。
- (42) 小松和彦「怪異」概念をめぐる覚え書き(天理大学考古学・民俗学研究室編『モノと図像から探る怪異・妖怪の世界』勉誠出版、二〇一五年)、九―一一頁参照。
- (43) 民俗学研究所編『民俗学辞典』東京堂出版、一九五一年、六五四頁。
- (44) 前掲書、六五四―六五六頁参照。
- (45) 佐々木高広『怪異の風景学——妖怪文化の民俗地理——』古今書院、二〇〇九年、三一―三二頁参照。
- (46) 前掲書、三二頁参照。
- (47) 佐々木高広「妖怪の出現する場所」(小松和彦編『妖怪学の基礎知識』角川学芸出版、二〇〇一年)、一五六―一五九頁参照。
- (48) 安井真奈美「妖怪・怪異に狙われやすい日本人の身体部位」(安井真奈美『怪異と身体の民俗学——異界から出産と子育てを問い直す——』せりか書房、二〇一四年)、二〇五―二三四頁参照。
- (49) 前掲書、二一一―二一八頁参照。
- (50) 安井真奈美「狙われた背中——妖怪・怪異譚からみた日本人の身体観」(安井真奈美『怪異と身体の民俗学——異界から出産と子育てを問い直す——』せりか書房、二〇一四年)、二三七頁。

(51)

前掲書、二四〇—二五二頁参照。